

淡青

27

2013/09

t a n s e i

【特集】

スポーツと東大。

太ったブタより
痩せたソクラテスより
たくましいソクラテスたれ

【サイエンスへの招待】

いつの日も死体の声を
——指先で進化の道筋に迫る遺体科学の世界

歳のととり方の違いで生じる格差とは？
——少子高齢化を社会階層論から見る

【キャンパス散歩】

本郷・駒場に続く東大の第三極
自然に恵まれた柏キャンパスを巡る



相撲の新田

新田一郎
法学政治学研究所
教授

1,300年超の相撲史においては
大相撲以前の部分こそ重要だ

新田教授は学生時代に東大相撲部で活躍し、現在は相撲部部長として部員に稽古をつけているという大の相撲好き。そんな教授が、1,300年を超える相撲の歴史とがっぷり四つに組んだのが左の著書です。一般に相撲と聞いてイメージする大相撲ではなく、大相撲以前の相撲史に重点を置いているのが大きな特徴。純粋な力くらべ、農耕儀

礼、社寺祭礼、大名の娯楽、庶民向けの見世物興行など、相撲が日本社会において多くの役割を果たしながら発展してきたことを伝えます。水戸黄門は若い頃よく辻相撲に参加していた、土俵の原型は取り囲む見物人の輪だった、昔は黒と白の横綱が流行したなど、素人目に興味深い記述もたくさん。本格派には本書が、ライトなファンにはイラストをふんだんに使った『相撲のひみつ』(朝日出版社)がおすすめです。



『相撲の歴史』
(講談社学術文庫/2010年)

ラリーの草加

草加浩平
工学系研究科
特任教授

学生の海外旧車ラリー参戦
プロジェクトを推進

草加教授は東大自動車部時代から約40年にわたって国内外のラリーに参戦してきた生粋のラリーリスト。全日本のナビゲーター王者についたこともある教授が、ものづくり教育の一環として取り組んでいるのが、「海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト」です。授業に参加する東大の学生たちが旧車を整備・改造し、自分たちでスポンサーを獲得し、あの「ラリー・モンテカルロ」をはじめとする海外の名だ

たるラリー大会に参戦するというもので、活動はすでに今年で4期目。ものづくりの力だけでなく、予期せぬ状況変化に対応する能力や、チームワークの大切さ、不慣れな外国の地に適應する力まで鍛えられる授業として注目されています。海外でも通用する「タフな東大生」はこうした授業から生まれるのかもしれませんが。



Team TAKUMI
<http://takumirally.com/>

武道の松原

松原隆一郎
総合文化研究科
教授

失われた日本人の身体感覚を
伝える術としての武道とは?

東大柔道部の部長を務め、自らも武道家として柔道や空道(打撃ありの総合武道)の稽古に励んでいる松原教授は、左の著書で武道の意義を教育的価値から論じています。教授によれば、現代の柔道が抱える競技力、女子への指導、JUDO化、安全性の4つの危機は、嘉納治五郎の柔道論を正しく理解しないことに起因するもの。柔道の価値

を「精力善用 自他共栄」という語で表した創始者の理念は、体罰やセクハラで揺れるいまこそ捉え直すべきなのです。武道には、日本人が失いつつある蹲踞や正座といった身体感覚を伝える効果もあるという指摘は、洋風の生活様式に慣れた現代人には思い当たる節ありありのはず。寝技や団体戦のやり方に特色がある七代戦柔道の魅力もよくわかり、東大関係者ならずとも興味をかきたてられます。



『武道は教育でありうるか』
(イースト新書/2013年)

マラソン「フェアタイム」の池上

池上孝則
工学系研究科
助教

天候や高低差といった条件の
違いを均一化して記録を評価

マラソンの記録は天候やコースの高低差などの要因に左右されます。こうした外的要因による影響を均一化した「フェアタイム」を研究するのが池上助教です。その方法は、出場選手の過去の記録から基準となるレース条件を仮想的に作り出し、個々の大会の記録をその条件下の記録として変換するもの。国内の大会はもとより、国際大会の結果も公平に比べられるのです。たとえば、真夏に行われた北京五輪男子

マラソンの優勝タイムをフェアタイムで評価すると、世界記録を大幅に上回ることに。サイト「ハートフルランナーズ」では大会別にフェアタイム検索が可能で、今後は海外大会にも対象が広がる予定。任意の大会の実タイムを他の大会のタイムに変換する仕組みも開発中。日本発のマラソン文化を世界に広めようと助教は燃えています。



ハートフルランナーズ
<http://www.heartful-runners.co.jp/>

東大生が必ず学ぶ駒場の体育とは?

教養学部生は必修科目として体育を履修します。違う科類の学生同士が交流するいい機会になるだけでなく、きちんと体系的に身体運動科学を学ぶのが特徴。その教科書として使われているのが、石井先生や深代先生や八田先生も所属する身体運動科学研究室が編者

となった右の一冊です。筋肉やバイオメカニクスについての東大生の知識はかなりのレベルにあるといえそう(!?)。また、AED(自動体外式除細動器)の使い方を全員が実地で学ぶのも大きな特徴。実際の使用経験は、緊急事態の現場で大きく物を言うはず。



『教養としての身体運動・健康科学』
(東京大学身体運動科学研究室編/東京大学出版会)